医療法人社団英明会　大西脳神経外科病院

大西脳神経外科病院だより　第37号

ぷれいん

発行日：平成３１年４月吉日
発行人：学術図書委員会
大西脳神経外科病院
編集責任者：吉野　孝広

大西脳神経外科病院の理念

生命を尊厳し、科学の心と芸術的技術と人間愛をもって病める人々に奉仕する。

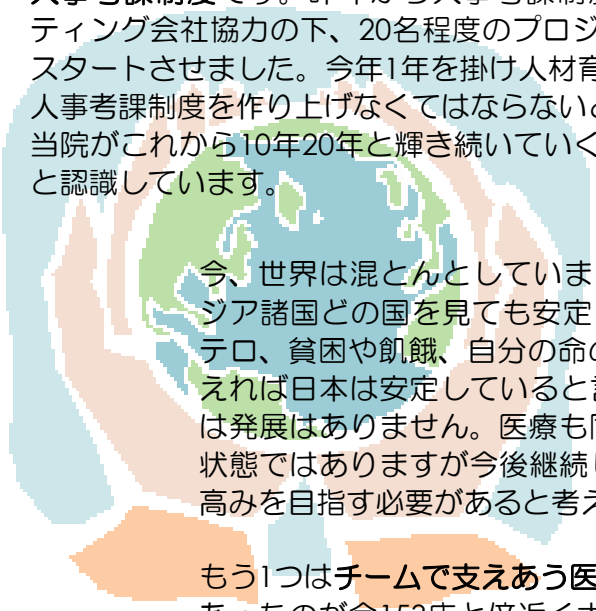
大西脳神経外科病院の基本方針

生命と人権を尊重した医療を実践する。
神経疾患の専門的高度医療を実践する。
常に新しい医学の修得に励む。
救急医療は医療の原点と考え、24時間対応する。
地域の医療機関との連携を密にし、地域協力型の医療を志向する

チームで支えあう医療

大西脳神経外科病院
理事長・院長　大西　英之

新年度を迎え今年の目標を考えてみました。
今年は2つの取り組みを行っていこうと考えています。まず一つ目は**人事考課制度**です。昨年から人事考課制度を構築するためコンサルティング会社協力の下、20名程度のプロジェクトチームを作り会議をスタートさせました。今年1年を掛け人材育成を目的とした当院独自の人事考課制度を作り上げなくてはならないと考えています。
当院がこれから10年20年と輝き続いていくための組織改革の第一歩だと認識しています。



今、世界は混とんとしています。アメリカ、ヨーロッパ、アジア諸国どの国を見ても安定とは言い難い状況です。戦争やテロ、貧困や飢餓、自分の命の保証もない国も少なくありません。それを考えれば日本は安定していると言えます。しかしその安定に胡坐を掻いていては発展はありません。医療も同様です、我々の病院もある程度安定した経営状態ではありますが今後継続し良い医療が提供できる組織体制を作り更なる高みを目指す必要があると考えます。

もう1つは**チームで支えあう医療**ということを考えています。開院当初82床であったのが今153床と倍近く大きくなっています。職員も3倍以上増えていま

す。お互いのコミュニケーションがなかなか取れない、自部署間では知っているが他部署のスタッフとは話をしたこともないというようなことも増えてきています。
受診された患者様に対し一連の流れとして各部署が関わります。入院になれば看護師をはじめ医師を中心にスタッフが共同し治療が進められるわけです。すべての職員が患者治療のため同じ方向にベクトルを合わせ一丸となっていかなくては組織としてはうまくいきません。自分のことだけ、自部署のことだけではなくお互いを理解し相互に協力する意識がなければよい医療はできません。人が増えれば増えるほどお互いのコミュニケーション、支えあう医療がないとうまくいかないと思います。
部署間の垣根をなくしチームとして、大西脳神経外科病院の職員としてお互いが支えあって仕事をして行くのだということを心に留めていただきたいと思います。

『明石駅前クリニックの２年目を終えて』

大西脳神経外科病院附属　大西脳神経外科明石駅前クリニック
院長　　*垰本　勝司*

Ohnishi Neurological Center

大西脳神経外科病院附属明石駅前大西脳外科クリニックが2016年12月にオープンし、2017年１月から診療を開始して丸２年経ちました。
あっという間の２年間で、クリニック診療の経験がない新参者の我々にとっては勝手が違うことの多い日々でした。初診患者さんの中には脳外科の全ての検査が出来る診療所だと勘違いされて来院された方も多く、CTやMRI等の大型診断装置のある本院で検査する必要性を説明するのにも手間取りましたが、次第に当院の診療体制をわかってもらえるようになりました。初年度の近畿厚生局による新規開業指導は、まるで警察での取り締まりではないかと勘違いするほど厳しいチェックが入りましたし、２年続けて指導されたことで前途多難な感じを受けましたが、初年度の指摘を改善したことがクリニックの評価を上昇させつつあると思っています。しかし、経営的には多くの課題があることもわかってきましたので、病院とは違った役割をより徹底して改善していきたいと考えているところです。
クリニックとしての昨年の活動は昼下がりのミ

二講座を開いたことでしょうか。かかりつけ医としての役割を考えたとき、通院して下さる地域の患者さんに、脳外科疾患を少しでも
理解してもらうことが必要であろうと感じたからです。６月から毎月第３水曜日の午後１時半から３０分間の、身近な疾患をわかりやすく解説して質問をうける寺子屋的な場を作りました。患者さんの大半が高齢者ということもあって、関心の高い『物忘れ・認知症』から始めて２回に渡って行い、続いて『頭痛』、『めまい・ふらつき』、『手足のしびれ』、１２月は締め括りとして『脳疾患予防の為の生活習慣』と題して症例提示もしながら行いました。クリニックの待合室は広くはありませんから、あらかじめ１０名までの予約制としました。参加者がたとえ一人でも行うつもりでしたが、おおむね好評で１０名を上回る参加の時も有り毎回のように来て下さる方もあって、やってよかったと思っています。来年も続けて欲しいという要望が寄せられていますので、患者さんの診療への信頼をより高める為にも
身近な問題を取り上げながら患者さんとのコミュニケーションを図れたらよいかなと考えているところです。大西理事長、久我・兒玉両副院長の助けを借りながらスタッフ一同頑張っていきますので、本年もどうぞ宜しくお願いいたします。

今年はいのしし年

副院長　*久我　純弘*

2019年を迎え、平成最後の年になることが既に決まっています。次の年号も4月1日には事前に発表されるそうです。来年の2020年には東京オリンピックもあります。更に、いのしし年は4年に1度の統一地方選挙と3年に1度の参院選挙が重なる年だそうで、今年は何かと慌ただしく落ち着かない年になりそうです。世界ではいわゆる米中貿易戦争が始まり、更に将来の覇権争いになりそうな雲行きです。トランプ政権に始まる自国第一主義が難民移民問題なども加わってヨーロッパ各国にも広がり、アメリカ、ヨーロッパが不安定な中、イギリスはEUを脱退します。近くでは日本と韓国も隣国ながら相変わらずぎくしゃくしています。

当院は回復期31床が加わって計153床となり約1年半が経とうとしています。それに対し、常勤脳神経外科医は全員で12名と少なく激務が続いています。幸い、お互いが自分の仕事に厚い壁は作らず相互に融通し合って業務をこなしてくれています。他部門をみても、人員確保が急務である部署が複数ありますが、部署の垣根を越えてお互いに協力し合いながら業務をこなしてくれたらありがたいと思います。所帯が大きくなるほど部署

Ohnishi Neurological Center

間、スタッフ間の意思疎通、コミュニケーションが疎遠になりがちですが、是非、同じ病院の仲間同士として助け合っていただきたいと思います。ただ、多くの退職者がでた原因は何でしょうか。色々な要因があると思いますが、そのことを解決しないと貴重な人材が失われ、同じ事の繰り返しになりそうです。今年（私も）は、いのしし年ではありますが、様々な数の指標に向かって猪突猛進ではなく、安全な医療を目指して熟慮断行が望まれる年でもある気がします。今年もどうかよろしくお願いします。

次の時代

副院長　*兒玉　裕司*

31年目にして、平成最後の年を迎えることとなりました。医療職では、まず患者さんの年齢を確認する必要があるため、年齢と並んで記載してある生年月日の欄を習慣的に見ます。思えば、研修医の頃は明治生まれの患者さんもたくさんおられましたが、最近は大正生まれの方を目にする機会も少なくなりました。少し前までは、平成生まれといえば未成年という認識がありました。今は当院の職員にも平成生まれの方が多数おられます。月並みですが、月日の経つのは本当に早いものです。そしておそらくITを主因として、社会の変化は月日を越えてあまりに早くなっています。医療は社会によって形成された生活基盤の一つなので、医学を学ぶという、ある意味自己完結型の努力とは異なり、社会環境、広くは時流に合わせた変化がなければ必要とされません。幸い当院には、昭和の団塊の世代から平成2桁生まれまでの、約50年の幅を持った人材がいます。日々の仕事では上の経験や病院の慣習に従うことが多くとも、その上司はSNSや最新のトレンドとは縁遠いかもしれず、また違和感を感じる院内の慣習は本当に時代遅れかもしれません。職員全員が病院の変化と成長に関わっています。老若男女、力を合わせて平成の次の時代にも求められる病院を育てていきましょう。

脳血管内治療 2019

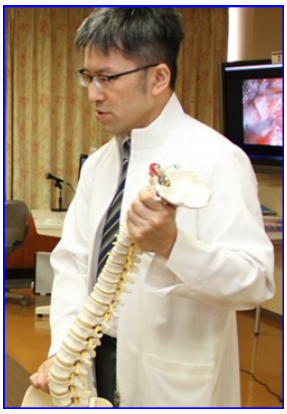
南3階病棟　脳卒中センター長　大西　宏之

2018年脳血管内手術は249件と一昨年より微増し過去最高の件数を達成することができました。まずは日々の皆様のご尽力に感謝申し上げます。脳血管内治療は今や様々なevidenceが確立され、脳卒中診療においてはmustの時代に突入しています。全国的にも専門医の数は増加の一途にあり、以前は血管内治療ができるというだけで施設としてのpriorityがあったのですが、今やそれだけでなく結果が求められる時代となっています。急性期脳卒中治療は一刻もはやく治療することが患者の予後を左右します。当院でも積極的に時間短縮の試みを行っておりますが、ようやく実を結んできたように思います。

しかし一方では24時間365日、この治療水準をstaffが疲弊することなく維持することにすこし課題が残りました。地域における脳血管内治療は今後ある程度集約化され、高度脳卒中センターが担うようになってきます。当院は脳神経外科専門病院として、その一役を担う義務がありますので、今からすこしずつ準備を進めていく所存です。2019年新年を迎え、新たに1名の専門医に加わって頂きました。指導医1名、専門医4名の計5名体制でさらにパワーアップしていますので「救える命をひとつでも多く!」をモットーに精進して参ります。本年もどうぞよろしくお願い致します。

「正」は「一」＋「止」

北2階病棟　脊椎・脊髄センター長　山本　慎司



2019年は我が国にとって非常に重要な一年です。数々の自然災害や大事件、爆発的な技術革新、社会構造の変革、国民の超高齢化、新時代の帝国主義とポピュリズムなどに代表される30年間の「平成」の世が終わりを迎え、新たな時代の幕が開きます。天皇陛下御退位と皇太子殿下御即位、元号改変はもちろんですが、国民それぞれが改めて過去を反省し、さらにより良い社会をもたらそうとする気運を高め、一層努力するスタートの年であります。

我々のアイデンティティーであるこの病院にとっても同じです。時代の潮流に振り回されることなく、20年後や50年後を見据え、新時代の医療人を育成し、新規知見を国内外へ発信し続け、地域のみならず、社会に貢献し続けなければいけません。

より安全で質の高い医療を提供し続けるために、新たな知識や技術を駆使し常に最善を尽くす努力が必要です。豊富な経験に基づくことは非常に重要ですが、時として足枷になるさまざまな過去の慣習に固執してしまうことがないように、各々が反省し、よく考え、意見(異見）を交えることが、組織の発展には必要です。

猪年ではありますが、「正」しいことを行うためには猪突猛進ではなく「一」旦立ち「止」まり振り返ることも必要で、今年がその大きな節目であると考えます。

患者さまの「自分らしさ」を大切に

看護部　部長　*上原　かおる*

平成最後の年を迎えました。平成の新元号発表を深夜明けで見ていたことを思い出します。あれから31年、高齢化が進み、2025年を目途に高齢者の尊厳保持と自立生活の支援の目的のもとで、可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるよう、地域包括ケアシステムが構築されています。その中で、当院は急性期医療を担う場所として存在しています。私達は、患者さまが入院中もできる限り自分らしい生活を送ることができるよう、支援しなくてはなりません。

そのためには、患者さまにとっての「自分らしさ」とは何かを把握する必要があります。看護の基礎で学んだ「人間を全人的に捉える」ということです。それは、看護部の理念である「常に患者さまの視点で看護を実践する」につながります。専門職としての知識・技術の習得はもちろんのこと、感性を磨いて豊かな人間性を持ち、常に患者さまの「自分らしさ」を考えて心に寄り添ったつなげる看護や介護を提供していきたいと思います。

求められる退院支援を目指して

南4階病棟　師長　*浦川　佳子*

2025年の社会情勢を踏まえ急性期病棟でも退院支援が必要とされています。在院日数の短縮という観点からも退院支援は欠かせず、入院時からの退院支援が求められています。

2019年も「患者さまのその人らしさ」を大切に、多職種との連携を密にし、患者さまの心に寄り添える看護提供と、患者さま・ご家族の求める退院支援を目標に日々取り組んで参りたいと思います。

今年の抱負

外来・手術室・中材室　師長　*原　麻夕美*

外来では、受診される患者さま・ご家族に対して、わかりやすい説明・丁寧な案内を行い検査や診察、治療をスムーズに安心して受けていただけるように医師、外来看護師、外来クラーク、多職種と協働していきたいと思っています。

手術室では年々手術件数が増加しているため、患者さまがより安全に手術を受けて頂けるよう安全確認を怠らないこと、また医療技術の進歩に伴い新しい機器の導入、それに伴う医師の手術手技に対応できる技術の向上を図っていきたいと思っています。

今年は病院機能評価受審の年でもあり、手術看護手順やマニュアルの見直しを行うとともに、術前・術中・術後看護のあり方について振り返るよい機会だと思っています。患者さまに寄り添った看護の提供ができるよう外来看護師や病棟看護師との情報共有をより密に行っていきます。

何事にも前向きに

南3階病棟　師長　*前田　ゆうこ*

2019年1月1日0時、今年も娘と声をそろえてカウントダウンをしました。高校生の娘は思春期真只中ですが、大晦日のこの瞬間はお互い大切にしていて、いつも大声でカウントダウンをします。それから乾杯して「今年もよろしくお願いします。」と新しい年を迎えます。40歳を過ぎて、年を取るのは嫌だなと思うのかと思っていましたが、様々な面で楽しく考えるようになり自分でも不思議な気がします。

2019年は新しい年号に代わる節目の年です。自分を見つめ、弱みに対してアクションを起こせるようにしたいと考えています。
秋には機能評価受審もあり、業務内容やマニュアルの見直し、記録項目の整理には良い機会になります。仕事もプライベートも前向きに、一つ一つ確実、丁寧に、を心がけて行動したいと思っています。

「つなげる医療」

北3階（回復期リハビリテーション）病棟　副師長　*米田　芳子*

回復期リハビリテーション病棟は、2年目の新年を迎えることとなりました。多職種の皆様にも多大なるご協力をいただき、2018年度は利用率も100%近くを保持できるようになりました。

2019年度は、機能評価の受審があります。回復期リハビリテーション病棟は初めての受審であり、問題の明確化、運用の見直しとなる良い機会だと思っています。チーム内での回復期の役割を活かし、多くの患者様が望む在宅復帰に近づけるように精進していきます。同時に、様々なデーターを収集し看護の専門性を活かせるような病棟を目指していきたいと思います。

看護実践能力の向上を目指して

北2階病棟　副師長　*宮脇　満花*

2019年で背椎・背髄センターとして6年目を迎えます。
昨年は6名の新入職者を迎え、新しいスタッフと共に安全に医療提供ができるように取り組んできました。また、スタッフそれぞれが役割以外の業務を担いながら、日々頑張ってくれている姿をみて、頭が下がる思いです。

最近よく感じる事は、時代の変化に伴い、年々多様な背景をもつ患者さまが多くなっている現状です。その様な現場で私達看護師は、本当に必要なケアは何なのかを早期に見極める看護の視点・看護力の向上に努めていかなければなりません。そのためにも、患者さまの訴えをくみ取れる感性を磨き、寄り添った看護提供ができるように個々のスタッフが、常に新しい知識、技術に関心をもち学びを生かせる病棟でありたいと考えます。
それぞれの立場で、力一杯、出来る事を頑張る1年間にしたいと思います。

超高齢社会の薬の安全な管理

薬剤部　部長　*違口　晴子*

今年は、改元される年にあたります。新しい年号は、新しい世代の始まりを感じさせます。
しかし、日本は65歳以上の人口が全人口の21%を超える「超高齢社会」となっています。

この人口動態から安価な後発医薬品の普及促進をするという厚生労働省の指導に沿って採用を進めてきました。後発医薬品は、医薬品名が長く覚えるのが大変です。その手助けとして、記録するという手段の必要性が高まります。お薬手帳(電子版を含む)、お薬の情報提供書などを使用して自分の服用している薬を管理して頂くことを今年も勧めるとともに、安心で安全な薬の服用をして頂けるように、更に丁寧な説明をして、理解して頂きたいと思っております。

相手の存在を認める、相手に認められる

事務部　部長　*藤井　健*

「私は褒められて育つタイプです」という、ご自身の発言を、この５年くらいの間に複数の方から聞きました。そのたびに、表現し難い、こそばゆい感覚がありました。

　褒めらると悪い気はしない、あるいは「何か下心があるのでは？」と、褒めてくれた相手を疑う。褒めるという行為は、そこに褒める側の感情や評価が入るため、受取手にもその人ごとの感情を生み出します。

　一方、「相手を承認する」という行為は、事実を事実として認め、それを伝えることで、受け取る側は、「気にしてくれている」「変化に気づいてくれている」という感情を持ちます。褒めることと承認することの違いを判り易い例で示すと、散髪してきた人に「似あうね！」と伝えるのが褒める、「髪を切ったのですね」と伝えるのが承認です。伝える際の言葉のトーン、表情、発信する相手との関係等によっても其々伝わり方は変わりますが、褒めることには評価が入り、承認は事実を伝えるという意味であることはご理解

いつも頼りになります

いただけると思います。

　仕事の上でも、プライベートでも、相手を承認すること、誰かに承認されることによって、それだけでコミュニケーションは深まります。承認の例を他にも挙げると、挨拶する、お礼を言う、ねぎらう、感謝する、仕事を任せる、目線を合わせて相手を見る、メールに直ぐ返信する、得意な話題を振る、夢について聞く、その人の家族を気遣う等々、普段何気なく行っている行為も、相手を承認する、誰かに承認される行為なのです。

年初の朝礼での理事長講話にあった、「チームで支え合う医療」。患者さんを中心に、全職員が部署の垣根を取り払って、お互いに支え合うことを実践する上で、まず承認し合うことが組織内で日常となるよう、私自身も率先して誰かを承認していきます。承認されることも期待しつつ。

2019年を迎えて

事務部　参与　　森脇　士郎

2019年は世界の政治状況、経済状況も激変の可能性を秘めた年になると思われます。また国内も５月１日から元号が変わり、１０月には消費税が10%になる予定等、大きな節目を迎えます。病院経営も消費税の増税は大きな影響を受けることになり、今まで以上に緻密な経営をしていかないと生き残れない状況になると思います。職員の働く環境を良くし、医療の質を上げ、患者様に満足して頂ける医療を提供し続けるために、自分のできる分野で、いかに病院に貢献できるかを考えながら、目標を立てて進めていきたいと思います。

「今年に賭ける想い」

事務部　次長　瀧原　健司

2019年がスタートしました。私は従来、医事課・医療情報管理室・地域医療連携室等の業務管理に携わり、多くの職員の方々にご協力頂きながら取り組んで参りました。そして昨年秋より、秘書課も管轄させて頂くようになり、更に多くの職員の方々と協議を行う機会が持てるようになりました。

一人で出来る仕事には限界がありますが、多くの有能な職員が、互いに連携・協力しあい100%の力を発揮するために、更なる“チームワーク”の構築を行うことが私の役割と認識し、その役割を果たして行きたいと考えております。体調管理をしっかりと行い、皆で頑張りましょう！

忘年会で皆さんいい笑顔♡

多職種連携の充実

地域医療連携室　主任　尾﨑　久美子

患者様の視点に立った切れ目のない医療及び介護の提供体制が考えられるようになってから10年が経過しました。最近では医療チームと介護チームとの垣根を超えた多職種連携も実践されるようになり、医療者側の私たちも、患者様の在宅生活に寄り添った支援を考え取り組むことができるようになってきました。患者様にとって、病気の治療は通過点であり、その後、安全に安心した生活が送れることがゴールだと思います。地域医療連携室は院内では医療チームとして、院外では介護チームとして、そして、この二つを繋ぐパイプ役として、大変重要な役割を担っており、私たちに求められるものは大きいと考えます。院内・院外問わず、皆さんから信頼され、「地域医療連携室に任せたら大丈夫！」と言ってもらえるような部署を目指し今年も頑張ります。

新たな時代

ＩＴシステム管理室　課長　中田　隆司

情報革新目覚ましい平成も終わりに近づき「新たな時代」に入ろうとしています。

当院のコンピューターシステムは、電子カルテやＰＡＣＳを中心にした医療系システムが患者様の情報を管理して、効率的な医療の提供に役立っています。一方、情報系システムと呼ばれる事務処理分野では給与、経理、勤怠管理などの総務系は以前より稼働しています。しかし、その他の事務処理ではＥＸＣＥＬやWORDを使って文書を作成・印刷・押印・提出・保管するやり方で、手書き書類を作成していた昭和と何ら変わることがありません。

また総務連絡に使用する掲示板は職員食堂１か所のみで他は各部門長が周知に努めるやり方です。南館増築前であれば館内は適度な広さで運用に耐えれたかもしれませんが、増築後の現在では、職員が大幅に増えたため以前のやり方では効率的とはいえないように思われます。

今後全職員が一丸となって各種課題に取り組むには情報格差が発生して問題になると思われます。

本年は全職員が同じ情報をもとに目標に向かって進むことができるよう情報系システムの「新たな時代」を作っていきます。

目的と目標を持つために

放射線検査室　技師長　佐藤　直隆

昨年度より放射線技師数名の退職があり、2019年は技師の確保と教育という点が大きな課題となりそうである。放射線技師の活動範囲は脳神経外科以外に目を向けると広く存在する。各個人が強い思いをもって目的・目標に向かって移動していくことに関しては応援しなければならないと思う反面、そうでない場合は教育に問題があったのではと私自身の反省点となっている。今後新たに就職してくる若い技師に対し、将来に対する思い（目的・目標）をどのように持たせるか、また仕事にやりがいを持つことができるかなど、どのように教育していけばよいか、新たに考えを修正する必要がると感じている。また在籍技師に対しても目標をしっかりと持たせ、専門性を重視した活動を行えるよう推進していきたい。

楽しい1年に

リハビリテーション科　技師長　山本　喜美雄

「楽しい一年にしていく」これが今年の目標です。「なんとも在り来りで、漠然とした幼稚な目標なんだろう」と思われた方もいらっしゃるでしょう。

「楽しい」とはどういうことか？価値観の違いからその感じ方は人それぞれです。「能力にプラスになること、新しい能力に気づける可能性がある何か」をしている時、私は楽しいと感じます。

避けたいと思う不得意なこと、嫌いなことは多々ありますが、ここ数年は、その中に楽しく感じられる要素を一つでも見つけてやってみることにしています。要は考え方次第。やってみると案外楽しいなと思えることが沢山あるので不思議です。楽しく１年を過ごすためのちょっとした努力を今後もしてみようと思います。

新しいことへの挑戦！

今年の抱負

栄養管理室　主任　田渕　鉄也

昨年は、管理栄養士が2名体制となりました。今年度は、今以上に他部門と連携をスピーディーに対応していくことを心掛け、入院患者の低栄養防止、早期回復、早期退院の手助けが出来ればと考えています。また、回復期病棟ではリハ栄養の概念を取り入れていき、より効率的な機能回復を実践する栄養ケアプロセスを構築していこうと考えています。栄養ケアプロセスを実現させるためには、他部門との協力が重要となってきますので、本年もどうぞよろしくお願いいたします。

「死んでもやる」

臨床検査室　臨床工学室　副主任　池田　紘二

元号の変わるこの年。今年の課題は“やる”に決めました。
ソフトバンクの孫社長、ホリエモンこと堀江さん、世界のイチロー選手、百獣の王武井壮さん、いつやるか？今でしょの塾講師の林先生。成功者は共通して、“やる”ということに重点をおいています。
昨年読んだ本の中に、“やる”には4種類あると書かれていました。

①　まぁやってみようかな。②　やる。③　絶対やる。④　死んでもやる。

限られた時間の中で本当にやるべきことを考え、決めたことは「死んでもやる」というぐらいの強い意思で、物事に取り組んでいきたいと思います。

やらない事を決める

医療技術部　副部長　吉野　孝広

平成元年に理学療法士になり30年、新たな元号となるこの年はまた何かに取り組むべきと初日の出に向かった。一人の理学療法士として、また医療技術部の責任者として、やるべきこと、やりたい事は山ほどある。とは言え計画的に行わなくては無駄に時間を費やし良いものは出来上がらないだろう。最近読んだ本の中に「何をするかではなく、何をしないかを決めることが重要である」と書かれていた。しないことを決める…欲張りな私にとっては非常に難しい事のように感じる。良いとこを見せようと欲張らず「やらない」と冷静に判断できる余裕をもって一年を過ごしたいと思う。

編集後記

インフルエンザで幕を開けたようなこの年、「ぶれいん」新年号が出来上がりました。毎年新年号は変わり映えもなく各部署責任者の方の挨拶となっていますが、職員の方々にはこれを読んで自部署の責任者がどう考えているかが少しでも分かって頂けたらと思います。今年も一丸となり頑張りましょう。　（吉野）